

毛沢東の著作にみえる成語の使い方

大 原 信 一

I なぜ毛沢東の著作をとりあげるか

II 成語の使い方

I なぜ毛沢東の著作をとりあげるか

1. 毛沢東思想の学習について

1964年の夏に中国を訪れたさい、北京の中央人民放送局にたのんでラジオ番組を約10本のテープに録音してもらったことがある。そのなかに「鞋的故事」（靴の話）という少年少女むきの物語が入っていた。これはその頃の「広播報」（ラジオの番組を報ずる日刊の新聞）を見ると、何回もくりかえし再放送されているから、全国の少年少女に知れわたっていることと思われる。

撫順市新民街小学校の生徒である李青蓮という少女が、母親の手作りの新しい赤い靴をはいて登校する。一人のおばさんの押してきた一輪車がぬかるみに落ちこんで動けない。青蓮は手伝いたいが、新しい靴が気になりとうとう通りすぎてしまう。雷鋒おじさんの事を思いだし、歩きながら考える。雷鋒おじさんは困っている人々を助けた。なぜだろう、ほかでもない、「雷鋒叔叔做好事，是為了幫助別人解決困難」（雷鋒おじさんがよい事をしたのは、他人を助けて困難を解決するためだ）。青蓮はとってかえし、靴の汚れるのもいとわず、おばさんに手を借して車をおし動かす。

この物語は、はじめ主人公である少女が導入されて、彼女の状態・環境

が簡単にのべられ、行動と内面的葛藤が交錯しながらしだいに表現の次元が高まっていく。主題は「幫助別人，解決困難」ということである。われわれは一人の少女の行為を通して、中国の少年少女のあるべき生活態度、行動様式をうかがい知ることができる。自分の犠牲を顧みず、人を助け困難を解決する。李青蓮はそれを雷鋒から学び、雷鋒はそれを「毛沢東選集」から学んでいる。——「我們的同志不論到什么地方，都要和群衆的關係搞好，要關心群衆，幫助他們解決困難」（4巻1161頁——われわれの同志はどこへ行っても、大衆との関係をよくし、大衆に心をよせ、彼らを助けて困難を解決しなければならない）。

1964年の夏に、中国各地を訪れた時に、毛沢東思想の学習状況をいろいろ見聞した。西安から約百キロほど離れた烽火人民公社では、農家の白壁に「語録」がかかれ、入口には対聯がかかげられていた。貧農・中農・幹部とそれぞれにふさわしい言葉を毛沢東作から選んでかきつけてある。養豚の失敗の経験を総括するとともに、「矛盾論」を学習して問題は飼料にあることを知り、農作物の茎を細断する機械を自力で作って飼料問題を解決した。幹部の作風に問題があったので「中国農村的社会主义高潮」の序文や按語を学習するとともに、幹部みずから試験田を作って農業技術と指導力を高めた。また彼らの生産にたいする積極性を高め個人主義を防ぐため、「紀念白求思」（ベチューンを記念する）を読んだ。

西安のほうろう鉄器工場も毛著作の学習のさかんな工場であった。一週間に二日学習日があり、そのうち火曜日には毛著作から直面している問題に適当な文章を選んで学習し討論することになっていた。一番よく読まれていたのは、「關心群衆生活，注意工作方法」（大衆の生活に關心をよせ活動方法に注意せよ）はじめ、官僚主義をいましめ大衆路線を説いたものが中心であった。

以上はすべて1964年の話である。今にして思えば、その学習体験はどちら

らかといえは幹部の場合が多かったようである（ある農家の老人はボロボロになった「選集」をもっていた）。しかし、毛沢東思想が広く学ばれており、日常の生産と生活は毛著作ときりはなして考えられないということがよくわかった。1967年の夏、三年ぶりで訪れた中国における毛沢東思想学習の広さと深さは前回とは比較にならない。小学生から老人あらゆる階層にわたっていた。まさしく七億の魂をゆり動していた。長辛店の鉄道車輛工場の壁には「毛沢東思想的大学校」という大きな文字のスローガンが目についたが、中国全体がそのとおりであった。

2. 言葉への影響

毛著作が愛読され七億人の行動の基準となっている以上、毛著作の言葉は全国民の言語生活に何がしかの影響を与えているのではないか。1964年8月9日、ベトナム人民の戦いを支持する十万人の大集会が工人体育場で開かれた。演壇に上って発言する労働者、農民、大学生などの代表の言葉の中には、毛著作からの引用がしばしば聞きとれた。その年の旅行中の閑暇に耳にしたラジオの放送劇・ニュースなどもまたしかりであった。

67年の夏、郭沫若さんに三年ぶりでお目にかかった。私たちの組織している「毛著作言語研究会」に話が及んで、大阪市大の香坂教授が会員の七割が二十才代から三十才代の年輩であると話すと、「早晨八九点鐘の太陽」（午前八時九時の太陽）のような会だねと大笑した。「語録」にある言葉である。やがて招宴が始まり郭さんが歓迎の辞をのべた。「早晨八九点鐘太陽の先生們！」（午前八九時の太陽のような皆さん！）。

杭州の西湖の暑い昼さがり、小学生らしい男の子が自転車に二人乗りでやってきた。太鼓橋の急勾配が一気にのぼれない。すると、うしろの荷台に乗っている方が叫んだ。「下定決心，不怕犠牲，排除万難，去争取勝利」（決心をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をかちとろう）。これは語録にもとられているが、「愚公移山」中の一節で、若者たちにはと

くによく愛誦される。普通はこれをリズムカルに三回くりかえす。

毛著作のうち最もよく愛読されるのは、「老三篇」で、これはさきほどの「愚公移山」と「為人民服務」および「紀念白求恩」の三篇の短い文章をふくむ。天津に近い楊村の解放軍の部隊を見学したい、その部隊の毛沢東思想宣伝隊がいろいろの演目を演じてくれたが、その一つに、構成劇「紀念白求恩」があった。これは老三篇中のあの文章の全文をせりふ調と歌曲調に配して一篇の物語り風に編んだもので、中国の伝統的な語り物の要素をゆたかにもっている。軽重緩急のせりふと歌詞が胡弓、ドラ、手鼓太鼓などの簡単な楽器の奏でる音楽によくのっており、すばらしい熱演であった。「我和白求恩同志只見過一面……对于他的死，我是很悲痛的。」（わたしはベチューン同志と一回あったきりである……かれの死をわたしは悲しんでいる）。その声は低く、伴奏はいよいよ悲しい。私たちはベチューンの霊前に立っている気持におそわれていて、思わず襟を正した。

毛沢東思想宣伝隊は職場・学校・農村などいたる所にできている。その典型は解放軍である。全国人民の大多数の人が老三篇をそらんずるほどによく読んでいて、小中学生はみなソラで覚えているという話をきいていたが、この表演を見てなるほどと合点がいった。本を読んで目から覚えると同時に、構成劇のような形で耳から（標準音）で覚えるという場合も多いのである。私は1967年の旅行中、各地で中国の人が語録を読むのを数十回観察した。どこへ行っても、ほとんど標準音である。かなり強い方言のなまりで話す人でも語録を朗誦するさいは標準音である。解放前における、地方の方言の状態を知っている者にとって驚異に近いことである。いま、共通語の形成と普及の中心的な問題である標準音の普及という点についてながめると、毛沢東思想の学習運動は実ははかりしれない影響を及ぼしつつあるといえるのである。

「幫助別人，解決困難」や「下定決心……」などの示すように、毛著作

の各種の表現は現代中国語（口語）のなかに大きく投影している。今後この傾向はますます強くなると考えてよい。現時点でこの関係を明確にしておくことは現代中国語の実態を理解するうえで必要であろう。同時に、この問題は中国の共通語の性格を把握するうえで本質的な意味をもっていると考えられる。かつての「北京語＝標準語」という考えは、方言のうえに君臨する標準語すなわち北京の口語を至上とする一種の口語至上主義で、昔の文語至上主義の裏がえしである。これに反し、いま「普通話」とよばれている共通語は全国に普遍的に通用する言語という意味であって、方言の存在を必しも否定しない。いわば、一種の二重言語制であり、書面語と口語の相互関係を重視する。標準語から共通語への理念の展開は、中国の言語環境という現実認識の深化の結果である。現在の共通語が示しつつある北京語からの遊離¹、口語と書面語との関係を把握するうえで、書面語の典範とされている毛著作の影響を明確にすることがまず必要である。これが毛沢東著作言語をとりあげる第一の理由である。

解放軍文工隊の表演を見ながら、私は一つのことを気がついた。それは毛沢東の文章のリズムである。毛著作は政治論文が多い。内容からいって理づめの文章が多い。論理の運びに気をうばわれて、感情の存在を問題の外においていた。主題や文章の展開に応ずる姿勢の変化。文章の底を流れる感情の起伏。行間にひそむ微妙な感情の動き。文章の構成にみられるゆたかなリズム。構成劇を見て私は毛著作の読み方を改めて教えられた。その後、各地を旅行するうち、語録の言葉を編曲した数十の歌曲が愛誦されていることを知って、その感をいよいよ深くした。

詩人としての毛沢東は、中国革命を直接の土壌として、力にみちた雄大な自然描写と、孤独の深淵にいたる個性的な感傷を軸として、用語に現代

1 たとえば、「為」と「而」という文語成分を使った「為……而……」というパターン（我們應該為和平而奮鬥）の発達や、「百花開放」、「百家争鳴」という文語的な言語形式（とくに政治的のスローガンにおいて著しい）の発達。

口語を大胆にとり入れて、新鮮さをたたえた独自の世界を創造している。彼の政治論文は石に刻みつけたような彫りの深い硬質の文章で力強い文脈を展開しているが、たくみな比喩や古語・成語の引用が随所にはさまれて対照の妙、転換の妙を発揮している。

彼の文章は個性にあふれている。次章で扱う成語の引用のしかたを例にとっても、主体性の強さがうかがわれる。つまり、彼の文章は自分の頭で考えた思想の表現であって、引用は必要な場合に限られ、それも中国人のほとんど誰も知っているような平易なものが多いが自家薬籠中のものにこなしているから、引用は生き生きとしている。彼の個性的な文章表現そのものにみられる特徴を多面的なアプローチによって浮彫りにする必要がある。これが毛著作言語を取りあげる第二の理由である。

II 成語の使い方

まず「成語」という用語の範囲を明らかにしておく。この論考では一般的な用法に従うこととし、「辞海」の解説と「漢語成語小詞典」（中華書局、1958）の編集方針に依った。「辞海」はこのべる：「古語の常に今人に引用されるものを“成語”という。或は経伝より出、或は謡諺より来る。大抵は社会の間に口習耳聞され、衆人の熟知するものなり」。この定義だけでは、社会の発展に伴って生まれる新しい成語をすくいあげることができない。これにたいし、「小詞典」の範囲はほぼ次の三種類を収める。

- (1) 現代語に通用する成語。
- (2) 解放後に出現した、成語に類似する、あるいは成語になりつつある固定した言語形式。
- (3) 大衆の間に広く使用されている諺。

毛著作の文章表現の特徴の一つは、成語の創造的な使い方である。成語は具象的に生き生きと、簡潔に意をつくすという特色をもっているが、毛

著作中の成語使用のうち最も際立ってみられるのは、マルクス主義の立場と観点から、あるいは昔から伝えられてきた成語や諺を継承しながらその内容と形式に革新を加えたり、あるいは社会の必要にこたえて新しい事物や思想を反映する新成語を創造して現代中国語の表現をゆたかにしたということであろう。

成語という固定した言語形式は一定不変のように考えられやすいが、毛沢東はそういう束縛と戒律を突破して、成語を縦横に駆使して、その威力を発揮させている。以下、六つの面から、その使用法をながめることにする。

1. 本義に従い比喩的に使う場合

既成の set phrase を本義に従い使う場合は枚挙にいとまのないほど数が多い。一般的にいえるのは、引用のしかたは、古語の権威にもたれかかっていないということである。ここではその若干をあげるにとどめる。

(1) 葉公好龍（1巻44頁）。楚の国の葉の領主は龍を好み、持ち物に龍をほり、居室を龍の絵で飾った。天の龍がこれをきいて地界へおりたところ、葉公はびっくり魂を失ったという故事にもとづく（劉向、『新序』）。国民革命時代の蒋介石が口では「喚起民衆」をいっているが、民衆が立ちあがるとすっかり魂消たという文脈で使う。

(2) 初出茅廬（1巻174頁）。諸葛孔明が劉備の三顧の礼にこたえて茅屋を出て助けた故事（三国志、三国志演義）。「はじめて仕事を担当する、かけだし」の意味。戦争の中で戦争を学ぶことを唱え、茅屋を出てきたばかりの「紙上談兵」のかけだしは有能な高級指揮員にはなれないという。

(3) 才徳兼備（2巻514頁）。才徳完備した者を昔は聖人という。ここでは「徳」（政治的品性）と「才」業務工作能力を兼備した革命闘争の指導幹部育成の必要を説く。現在では「徳才兼備」ということが多い。

(4) 銅牆鉄壁（1巻134頁）。国民党がトーチカを構築してこれを金城鉄

壁と考えるのに対し、「同志諸君、ほんとうの金城鉄壁とはなにか。それは大衆である。心から革命を支持する幾百万、幾千万の大衆である」と考える。このような考えは1928年に彼の作の詩の中の「衆志成城」（人々の志城となる）という句にもうかがわれる。これは『国語』にもとづく。

(5) 精兵簡政（3巻1003頁，4巻1444頁）。人員をへらし機関を簡素化すること（この言葉はいま文化大革命の中で一つの目標となっている）。ここでは講演・演説・文章などが簡潔で要点をつかむことをいう。

(6) 短兵相接（乙種本24頁）。肉弾戦のことであるが，ここでは「日ましに激しくなっていく，つばぜりあいの階級斗争」にたとえる。

(7) 留得青山在，不愁没柴烧（2巻496頁）。青山あるかぎり，薪に心配なし。抗日戦争のさいちゆう短兵急の決戦をさけて持久戦を説い中でこの諺を使っている。「若干の土地を失っても，広大な機動の余地があって，国内の進歩と国際的援助および敵の内部的崩壊を促し，これをまつことができる。これが抗日戦争の上策である。」

(8) 世上無難事，只怕有心人（1巻175頁）。世間に難事はなく，ただ心がけ次第だ。この諺を引用して，革命戦争をやりながら戦争を学ぶのが重要な学習方法だと説く。

(9) 路遙知馬力，事久見人心（2巻489頁）。道遠くして馬の力を知り，事久しくして人の心を知る。長期にわたる残酷な戦争中における遊撃戦の戦い方についてこの諺を適用する。

(10) 黎明即起，灑掃庭除（4巻1132頁）。早朝におきて庭を掃除する。明の朱柏盧の『治家格言』にみえる。「人民の頭の中にあるおくれたもの（蔣介石を信用し，国民党とアメリカに幻想をいだいていることを指す）は，ほうきで掃除するように，我々はそれを掃きすてなければならない」。そして，この句を引用して「これは我々に一つの任務を教えたものである」と封建社会の格言を逆用する。

2. 新しい意味の付与

これには次のように二つの場合がある。第一は、社会や思考の進歩・変化の結果として、既成の成語に新しい概念をもちこむ場合で、1～7がそれである。第二は、感情的色彩（喚情価値）の変化を示すもので、8以下がそれである。これにはまた、従来の「褒義」を「貶義」として使う場合（8、9）と、「貶義」であったものを「褒義」として使う場合（10～13）とがある。

(1) 愚公移山（3巻1102頁）。山を移す決心をした愚公の決意の堅さに上帝が感動し、神を下界に送って二つの山を背負いさらせたという『列子』にある寓話。毛沢東は独自の解釈を与えた。人民大衆を上帝（神）とよび中国共産党を愚公にたとえた。人民大衆を神にたとえるが、こういう比喩は従来の文学作品などにもみられない。まさに価値の転換である。

(2) 人固有一死，或重于泰山，或軽于鴻毛（3巻1003頁）。人もとより一死あり，あるいは泰山より重く，あるいは鴻毛より軽し。司馬遷が獄中の友人任安に与えた手紙の一節である。司馬遷は自分の死がどう評価されるか，自分の死の社会的意味を計量した。その判断は主観にゆだねられている。毛沢東は「為人民服務」つまり人民の利益になるか，ならぬかを死の社会的意味を判断するうえでの基準にした。

(3) 实事求是（3巻801頁）。「实事」とは客観的に存在するすべての事物のことであり，「是」とは客観的なは事物の内部的なつながり，すなわち法則性のことであり，「求」とは我々がこれを研究することである（改造我們的学習）。漢書の河間献王徳伝にある「修学好古，实事求是」にもとづく。劉徳は儒家の経典を「实事」として，その中に真理を求めた。唐の顔師古の注は新解釈を与え，これを「務得事实，每求真是也」と解した。毛沢東はこの句にさらに一步を進めて新しい解釈を与えた。

(4) 速則不達（3巻1010頁）。「速かならんとすれば達せず」とは速かな

ることは必要としないという意味ではなく、盲動主義になってはならず、盲動主義は必ず失敗するという意味である(文化工作中的統一戦線)。論語にある句、ここでは、大衆から離脱せず、大衆の自覚と自発的意志にもとづいて活動を進めることを説く。彼の世界観によって新しい意味を与え、古い意味を打破した場合であろう。

(5) 牛鬼蛇神(甲種本517, 518頁)。反党反社会主義分子をいう。この句は「紅樓夢」(82回)や杜牧の「李賀詞序」にみえるが、ともに「とりとめもない話」という意味である。

(6) 東風压倒西風(語録74頁)。第二次世界大戦後の国際情勢が新しい転換点に達していることを示した言葉である(1957年11月、モスクーにおいて)。1963年11月19日の『人民日報』と『紅旗』の合同社論はこれにふれ、「毛沢東同志は中国の古典小説中の熟語をかりて、この情勢を形象的に比喩した」とある。その小説とは「紅樓夢」(82回)。妻妾同居の大人数の貴族の家ではたらく侍女の愚痴話として、「だいたいが家庭の中のことは東風(正妻)が西風(妾)を押さえるのでなければ、西風が東風を押さえるようにできているんですからね」とあるにもとづく。

(7) 対牛弹琴(巻837頁)。愚人にたいして深い道理を説いても無益というのがもとの意味。しかし毛沢東はこう考える。「牛を相手に琴をひく」ということには相手を嘲笑する意味がふくまれている。もしその意味をとりさって、相手を尊重する意味をもちこめば、琴のひき手を嘲笑する意味しかのこらなくなる(反対党八股)。【ここでは嘲笑される者は完全に逆転している。

(8) 明哲保身(2巻347頁)。りこうに保身をはかる。「既明且哲、以保其身」(詩経大雅蒸民)にもとづく。こういう旧社会の処世哲学は不必要となり、全く新しい意味(否定的な意味)を与えられて生きのこっている。

(9) 一团和气(2巻347頁)。なごやかな空気。もとは宋の程明道の修養

の深さをたたえた言葉である（『伊洛淵源録』）が、ここでは「なごやかな空気を保とうとして、うわべのことをいうだけで、徹底的な解決をはからない。その結果、団体にも個人にも害を与える」（反対自由主義）と否定的に使われている。

(10) 矯枉過正（1巻18頁）。あやまりをただすのに度をこす。本来、あやまりを直すには守るべき限度があることを説いた熟語であるが、毛沢東はこう考える「矯枉必須過正、不過正不能矯枉」（あやまりをただすには度をこさねばならない、度をこさなければあやまりはただせない）。古い封建的秩序を終結させるには大衆の革命的な方法によらねばならないという意味である（湖南農民運動考察報告）。

(11) 為所欲為（1巻18頁）。したいほうだいをする。「ごく短期間に、何億という農民が中国の中部南部および北部の各省から立ちあがろうとしており、その勢は嵐のように早く、猛烈で、どんな力も押えつけることはできないだろう。彼らは自分たちをがんじがらめにしているすべての網をつきやぶり、解放への道をまっしぐらにつき進むであろう」（10と同じ）。毛沢東はそういう農民の立ちあがりをこの句で表わして、彼らの行動を肯定し支持する。

(12) 発号施令（1巻10頁）。「彼らは命令をくだし、すべてを指揮している。」（同上）。「彼ら」とは立ちあがった農民の組織する農民協会をさす。「発号施令」とは人の上に立って威張りたがるという意味をもっていたが、ここでは一転して、奪権に立ちあがった農民の軒昂たる意気ごみを示す。

(13) 星星之火可以燎原（1巻101頁）。小さな火でも広い原野を焼きつくすことができる。小さな事が大きな禍のたねになるという喩えに用いられてきた。不吉な響きの言葉である。毛沢東はこれを逆用して、小さな火に大きい発展の可能性をみとめた。伝統の否定による継承・創造の鮮かな一例である。

3. 部分的とりかえ

これには二つの場合がある。その第一は、1～3のように、難字や文語にのみ使われる字を平易な文字もしくは口語に使われる字にとりかえる場合である。これは成語の一般的な傾向である(奪胎換骨→脱胎換骨)。第二は4～9のように、言語環境に応じて、既成の成語の一部をとりかえる修辭的方法である。

(1) 老生常談(乙種本25頁)。老書生の平凡な議論。「此老生之常譚」(三國志)にもとづく。「譚」を「談」にかえた。

(2) 有目共見(1巻150頁)。だれにもわかる。「有目共睹」の「睹」を「見」にかえた。

(3) 此起彼落(巻458頁)。起伏があること。「此起彼伏」の「伏」を「落」にかえた。

(4) 胸中有数(巻653頁)。胸中に数字を入れておく。原形は「胸中有竹」(または「胸中有成竹」)で、胸中に成算があること。ここでは状況または問題について数や量の面での分析を行うことを説いている。

(5) 不遠万里(2巻653頁)。ベチューンがはるばるカナダから抗日戦争中に医療隊に参加するためやってきたことをいう。『孟子』にある「不遠千里」の変形。

(6) 一哄而集(1巻74頁)。にわかにも集まる。原形は「一哄而散」(たかさんの人が大声をあげて散らばる)。ここでは組織と指導をかく大衆がガヤガヤと集まってくる状態がよく描写されている。

(7) 一触即跳(2巻498頁)。ふれるとすぐとびあがる。「一触即発」の変形。持久戦を説く中で、軽率で分別のない者を形容する。なお、「一触即潰」という表現もあるから、「一触即…」という文語的パターンに属するといえよう。

(8) 置之不答(3巻1114頁)。これに答えない。普通は「置之不理」と

いうセット・フレーズを慣用する。ここでは、「国民党の諸先生……諸君はこれに答えないでいてもよいのだろうか。諸君は回答しなければいけない……」と民主改革の実施を求める。「理」を「答」にかえることによって攻撃力と主体性が強化されている。なお、類似の表現として、「置之不顧」¹、「置之度外」などがある。「置之不……」というパターンとして取扱うことができる。

(9) 前赴後継 (語録75頁)。あとからあとから身を挺して進む。「前仆後継」(795頁一屍をのりこえて進む)の変形。

(10) 查有実拠 (巻1313頁)。たしかな証拠がある。この句は古い公文書に用いられた「事出有因, 查無実拠」という用語を利用した表現だといわれている。²

4. 位置のいれかえ

ある成語が修辭的必要から、場面に応じて、語順をいれかえることがある。1から3までがそれである。4はこれとはややちがった理由によっている。

(1) 振奮人心 (193頁)一人心振奮 (巻1037頁)。前者は「動詞+目的語」の構造をとり、後者では「主語+述語」の構造をとる。前者では人心をどうするかが問題であり、後者では人心がどんな状態であるかに重点がおかれる。

(2) 処之泰然 (882頁)一泰然処之 (348頁)。何事もなかったように平然としている。後者の方が「泰然」がより強調される。たとえば、「漠然置之」(348頁一知らぬ顔をする)はさきほどの「置之……」というパターンの強調形であろう。

(3) 輕重緩急 (巻868頁)一緩急輕重 (巻915頁)。前者では革命文芸と革命事業全体との関係(輕重の関係)、後者では農村における事態の緩急の

2 振甫「成語的運用」『中国語文』1965年第6期。

区別を、それぞれ指摘しているのです、それに応じて語順をかえたのであろう。

(4) 先斬後奏 (2巻527頁)。先に処置して後で報告する。この句は、国民党との関係についてのべている。事からの性質に応じていろいろな場合がおこりうる。それを「斬」と「奏」の二つの動詞を軸として造語している。「先奏後斬」(先に報告して後で処置する)。「斬而不奏」(処理しても報告しない)。「不斬不奏」(処置も報告もしない)。

5. 挿入と分離

場面に応じて、セット・フレーズを分離して間に語句をはさみ、あるいは強調し、あるいは文脈を展開する。

- (1) 大同中の小異 (2巻669頁)。
- (2) 使中国革命的面目為之一新 (3巻795頁)。
- (3) 視人民之痛苦若無睹 (2巻719頁)。

虚辞を挿入することによって、「大同小異」の「小異」,「面目一新」の「一新」,「視若無睹」の「若無睹」がそれぞれ強調されている。

(4) 積十八年之經驗,深知…… (巻1156頁)。孫文の「遺囑」にある形式を利用する。

(5) 掛羊頭,売狗肉 (2巻730頁)。羊頭をかかげて狗肉をうる。

(6) 搬起石頭,打自己的脚 (2巻731頁)。もちあげた石で自分の足をうつ。

諺を利用して、それぞれ次のような形に展開する:「憲政の羊頭をかかげて,一党專政の狗肉をうる」。「ヒットラーの石をもちあげて,ソビエト人民の足をうつ」。

(7) 不翼而飛,飛到……鑽進……,流到…… (1巻36頁)。羽根がないのに……まで飛んでいく。「不翼而飛」とは品物が故なく失くなることであるが、ここでは字義どおりに「帝國主義打倒」「軍閥打倒」などのスロ

ーガンが羽根がはえたように無数の農民の面前へとんでいく状態を表わすため使われる。もう一度「飛」をくりかえし、これを起点として「鑽進」(はいりこむ)、「流到」(ながれこむ)という動詞を連用する。上記の政治スローガンの伝播の速さを強調する。

6. 新 成 語

「毛主席は多くの新成語を創造した。たとえば、謹小慎微、遠見卓識、棄旧図新、無知妄説、蔵垢納汚、一窮二白、窮則思変。このような例はきわめて多く、ここにはいくつかをならべるにとどめる³」。

(1) 再衰三竭 (3巻888頁)。精根つきはてる。古語を基にした造語の一例である。「夫戦、勇氣也。一鼓作気、再而衰、三而竭」(左伝・莊公十年。戦というものは勇氣一つでございます。第一の太鼓で気を振り、第二で衰え、第三で尽きるのでございます)。これにもとづいて、「一鼓作気」(はじめの元気に乗じて事をなす)という成語が慣用されてきた。毛沢東はここで「再而衰、三而竭」の中の虚字をきりすてこの成語を作り、ヒットラーの軍隊がスターリングラード、コーカサスで前進を阻まれ、戦争が転機を迎えた状況を説明した。

(2) 一窮二白 (乙種本249頁)。

(3) 窮則思変 (同上)。

「他の特色のほか、中国6億の人口の著しい特色は一窮二白である。これは悪いことのようにであるが、実はよいことである。窮すれば変を思い、やろうという気が生まれ、革命を求める。一枚の白紙は、負担がなく、最新最美の文字を書き、最新最美の絵を描くことができる)。

「一窮二白」(貧しくて空白)は経済的にも文化的にも未開発の状態をいっているのだが、このいい方は「一清二白」、「一清二楚」(きわめてはっきりしている)などにみられる「一……二……」という形式をかりた造語であ

3 劉新友「毛主席樹立運用成語的典範」『中国語文』1960年10月号。

る。なお、この形式は人民公社の特徴をあらわす「一大二公」という定式をうんだ。「窮」はまた「行きどまる」という意味もある。よく知られている、易の「窮則変、変則通、通則久」(繫辭伝下)をかりて「窮則思変」と造語した。二つの「窮」qiong は意味はちがうが、qiong という文章のリズムでそのちがいをのりこえる。この種の用法はしばしばみられる。

(4) 内戦内行、外戦外行 (3巻1074頁)。内戦はくろうと、外国との戦はしろうと。国民党の軍隊を評したことばであるが、内 nei と外 wai で文章を展開させている。

なお、この種の手法を使って、「新民主主義的憲政」では、孫文の「促其実現、是所是囑」の「促」を軸として、実にユーモラスに話を運んでいる (727頁)。

また、「整頓党的作風」の中で、「主観主義、セクト主義、党八股はいまはもはや支配的地位をしめる作風ではなく、一種の逆風であり、一種の邪風であって、防空洞 (防空壕) からとびだしてきたものにすぎない (笑声)」とあるが、「防空洞」は、おそらく「脱離實際的理論是空洞的理論」(819頁)に通ずるのであろう。この「笑声」はそういう共通の了解を物語るのではないか。

(5) 経風雨、見世面 (3巻936頁)。風雨にさらされ、世間を知る。「われわれ共産党員は風雨にさらされ、世間を知るべきである。この風雨とは大衆闘争という大風雨、この世間とは大衆闘争という世間である。」(組織起来)。「経」の用法として、「不経事少年」(世間知らずの青二才)、「経事長一智」(経験をつめば賢くなる一実践論に引用されている「吃一塹長一智」いちどつまずけば、それだけ利口になる、という諺と同義)といういい方はある。また北京語には単に「冒風雨」(風雨をおかす)、「見世面」(世間を知る)という表現ならある。しかし、「経風雨、見世面」といういい方は全く新しい造語とみるべきだろう。

(6) 他們看見那些受人尊敬的小財東，往往垂着一尺長的涎水（1卷5頁）。「われらは羽振りのよい金持をみると、いつもよだれが出るほどうらやましくてたまらない」（中国社会各階級の分析）。「垂涎三尺」の改造であり白話訳である。

(7) 閉塞眼睛捉麻雀（3巻797頁）。目をつぶって雀をつかまえる。昔からの古い成語「掩目捕雀」（『三国志』・陳琳伝）の白話訳。

(8) 有人説，已經沒有了，天下太平了，可以把枕頭塞得高高地睡覺了（甲種本468頁）。「もういなくなった，天下は太平だ，枕を高くして眠れる」という人がある。」

これは「高枕而臥」（『史記』張儀伝）という成語の白話訳。

以上に取扱った材料のうち四字成語がもっとも多い。毛沢東の文章はいうまでもなく現代文体であって，現代文章語の典範とされている。それ故また成語使用の点でも典範といいうるのである。

「我們切不可強不知以為知，要『不恥下問』」（Ⅳ巻1442頁—我々はけっして知らないのに知っているふりをしてはならないし，『下問を恥じない』ようにしなければならない）などのような成語の引用のほかにも「總之，我們是一切依靠自力更生，立於不敗之地」（Ⅳ巻，1185頁—要するに，我々はすべて自力更生によって，不敗の地に立つ）や「我軍所到之處，敵人望風披靡，人民歡聲雷動」（Ⅳ巻1235頁—我が軍のむかうところ，敵は風をくらって潰走し，人民は歡呼の声をとどろかせている）などのような文語にぞくする慣用的表現も隨所にみられる。これらの事は，また中国の社会主義建設・社会主義革命の各時期を通じてみられるおびただしい政治スローガン—百花齊放，推陳出新，白手起家，勤儉建国，多快好省，紅透專深，厚今薄古，政治挂帥，興無減資，破私立公，鬪私批修，……などにみられる傾向とともに中国人の骨格血肉となっている何ものかを強く感じ

させることが多い。それは、いわば表現の根として、深層にひそんでいるものの躍動であり、噴出である。我々は五四以後の新しい文体の発達に注目しなければならないが、中国人の表現の幅の広さを見おとしてもならない。その幅の広さに対する積極的な価値評価があらためて必要なのではあるまいか。

(1968年10月1日)